

核なき世界へ 時超え命の伝言

広島の国際会議 画家・山内さん大作展示

「アートは科学者、市民との橋渡し」

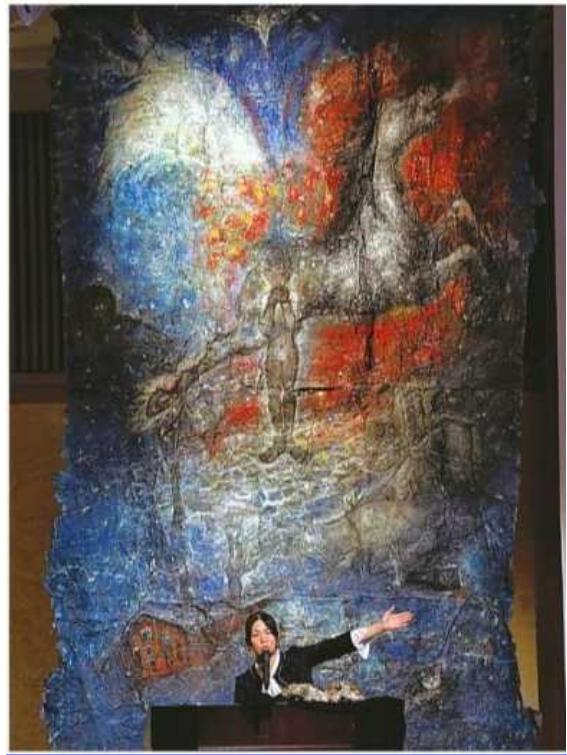
毎日新聞2025年11月17日夕刊

核兵器廃絶を目指す科学者の国際組織「パグウォッシュ会議」が被爆80年の広島で開催した世界大会の会場に、核と命を生涯のテーマとする日本の画家が描いた巨大な作品が掲げられた。「核被害の恐ろしさは目に見えないこと。見えないものを可視化するのは、科学者も表現者も同じ」。画家はともに歩んでいける手応えを得た。



山内若菜さん

大会は1~5日、平和記念公園（広島市中区）にある広島国際会議場で開かれ、約40カ国・地域から約300人が参加した。会場で目を引いたのが、日本画の手法を駆使した独創的な表現活動を続ける山内若菜さん（48）＝神奈川県藤沢市＝の大作だ。



パグウォッシュ会議世界大会の会場に展示された自身の作品の前でスピーチをする山内さん＝広島市中区の広島国際会議場で1日、佐藤賢二郎撮影

メイン会場の舞台両脇には、「命の三部作」と呼ぶ3作品のうち広島原爆と東京電力福島第1原発事故をテーマにした2作品が展示された。いずれも縦横3メートル以上。別室には幅15メートル、高さ3メートルもの大作「二つの太陽」が壁画のように展示された。

核問題の専門家が集まった国際会議に、芸術家として臨んだ山内さんは「論理的な科学者と感性で語る表現者は相反する立場のようでありながら、命に対するリスペクトがあり、人々の幸せのためにありたいという目的は共通している。一緒に核なき世界を目指せます。国際会議で作品を見てもらえてうれしい」と言う。

クラフト紙に貼り合わせた和紙に岩絵の具や墨などをにじませたり、こすったりし、しわやゆがみによる不定形が作品に動的な質感を生む。紙の裂け目から差し込む光さえも「希望」に見立てる。

描かれたのはペガサスや傷ついた少女、被爆建物、被爆樹木、無数の小さな生き物……。水爆実験で死の灰を浴びた漁船の先に見える赤い光は太陽か、核の炎なのか。

「核で全ての命がなくなった絶望と受け止める人もいれば、核なき世界を目指して船が進む希望の物語と捉える人もいるでしょう。絵の見方はさまざまです」

山内さんは福島原発事故に衝撃を受け、2013年から何度も福島を訪ねた。牧場で死んでいった牛や馬を描きながら、命の尊厳を奪う核の不条理への悲憤を募らせた。

創作の関心は被爆地の広島と長崎、さらに太平洋の核実験で被災した漁船にも向かった。昨年は広島市で初めての個展を被爆建物の旧日本銀行広島支店で開き、東京・夢の島の東京都立第五福竜丸展示館でも作品展を開いた。

被爆80年の今年3月、米ニューヨークの国連本部で開かれた核兵器禁止条約第3回締約国会議

では、水爆実験で死の灰を浴びた漁船を金びょうぶに描いた8作品が会場に並んだ。貝殻から作られる日本画の顔料「胡粉（ごふん）」は死の灰の隠喩で、立体的なびょうぶ絵は各国代表らの目を引いたという。

5月には、ビキニ水爆実験（1954年）で所属する多数の漁船が死の灰を浴びることになった高知県室戸市を訪れた。金びょうぶ絵の作品を持参して元漁船員らが登壇した集会に参加し、終わらない核被害を表現するイメージを膨らませた。

広島市での個展開催に協力してくれた関係者の縁で、20年ぶりの広島開催になったパグウォッシュ会議世界大会での展示が実現した。国連本部で展示した金びょうぶ絵や今回のために描いた看板なども展示し、会期中には作品解説や創作に参加してもらうワークショップも開いた。

閉会式に登壇した山内さんは「アートを通じて科学者と芸術家、市民の橋渡しをする可能性を追求したかった。参加できて幸せでした」と語った。パグウォッシュ会議のカレン・ホールバーグ事務総長は「素晴らしい作品を提供していただき、会議の空気を作ってくれた」とたたえた。

科学者たちと共に鳴した経験と成果を振り返り、山内さんは「私は描くことで絵物語が現実に近づくと信じています。時を超える命のメッセージを発信し続けたい」と語った。【宇城昇】

〈毎日新聞デジタル2025年11月8日〉



コーヒーブレークの会場に展示された山内若菜さんの作品「二つの太陽」＝広島市中区の広島国際会議場で2025年11月1日午後4時16分、佐藤賢二郎撮影